口寄せ語りの目連物について

吉　川　良　和

はしがき

目連故事は中国とその周辺，チベット，モンゴル，朝鮮半島からわが国まで，アジアの広汎な地域で伝承され発展してきた。1987年，安徽省祁門で開かれた目連戯国際研討会から帰国してより，わが国目連物の流伝を探索する旅は，源為憲撰『三宝絵詞』(984年成書）から始まり，『三国伝記・目連尊者救母事』，『もくれんのさうし』，2種の説経節『目連記』，能の廃曲『目蓮』，和讃『目連尊者』，民俗芸能『鬼来迎』，そして，北陸地方に伝わる2種の盆踊唄『目蓮尊者地獄巡り』などと遍歴してきたが，先年川島秀一氏の所謂口寄せ「目連救母伝説」に遭遇した[1]ので，直接気仙沼に赴き御示教をうけた。死者の霊を招来する行為を「口寄せ」という。目連故事研究者の間で，この口寄せ目連物はほとんど知られておらず，また口寄せの研究者には，東アジア一帯に広くに流伝する様々な目連物は，あまり馴染みがないように思われる。そこで，ここでは，まず口寄せに表れた目連物の諸話を紹介して整理し，わが国に伝わる目連物の総合的な研究に備えたい。

なお，目下，筆者は直接口寄せの語りを採取する条件を具えていないので，引用文は英文のものを除いて，諸氏が採られた文章を漢字や送り仮名，記号なども含め，すべてそのままを鈔写している。また，本来インド人であるMahā—maudgalyāyanaを，中国では普通「目連」と簡写するが，わが国では仏教の象徴的花である「蓮」を取って「目蓮」とする場合が多い。ただ，拙文では，引用に「目蓮」とある以外は，「目連」としている。

1　伝承されている事例

口寄せの目連故事は，筆者の目睹したかぎりでは以下の数例が報告されている。未発表のものも存在するだろうと予測はしているが，とりあえずこれらを対象に，管見を附してまとめておくことにしたい。

① 大和宗大乗寺の碑文

② 大和宗の縁起並大乗寺史録・大和宗の縁起[2]

③ 菅原昌夫が伝える祭文[3]

④ 菅原きせが語る目連故事[4]

⑤ 阿部まつみが語る目連故事[5]

⑥ クネヒト・ペテロ氏の報告する目連故事[6]

⑦ 金野カツメが語る目連故事[7]

⑧ 千田よしのが語る目連故事[8]

2　大和宗の口寄せ

川村邦光『巫の民俗学』[9]や川島秀一『憑霊の民俗』[10]によると，仙台藩領内の口寄せは天台宗の中尊寺が管轄していたが，1937年に経済的対立から「天台大和教」を結成して独立した。さらに，39年に「口寄せ」は人心を惑わすとして完全に天台宗から排除された。戦後，53年に宗教法人「大和宗」として認可され，岩手県東磐井郡川崎村薄衣の聖徳山大乗寺を本山と定め，そこを活動拠点とした。『宗教法人「大和宗」規則』によると「盲人を教師となし，万邦大和の教義を広め，儀式行事をおこない，大乗仏教の真髄である三力をもって信者を教化育成する」[11]と謳った。だが，2004年1月，川島氏に案内され訪れたときには，すでに活動停止状態ということだった。

口寄せをするのは盲目の女性で，恐山などでは「イタコ」と称されるが，大和宗の口寄せは「オカミサン」（アガミサン，オガミサマなど）と呼ばれる。オカミサンは死後7日目や百日目に，死者の親族に対して死者の口寄せをするのが，大和宗の口寄せだということである。その場で，死者の心持ちを伝える。例えば，心安らかであるとか，苦しんでいるとか，親族に何かを依頼するなど……，それらを聞いて親族は，安堵したり，苦しんでいる死者を救う手だてを講じたり，願いを叶えることで，遺族も心が落ち着くのである。

3　口寄せ語りと目連との結合

さて，本来口寄せと無縁の目連がいかにして結びついたかは，大乗寺境内にある「教祖貝田大法尼　旭大法尼精霊塔」石碑①の裏側に縁起があり，

> 大和宗の縁起を尋ねるに其の昔御釈迦様が御弟子の目蓮尊者に伝授された招霊の秘法は中国に伝はり更に一千余年前慈覚大師に依て我が国に伝はつたのであります当時の盲人特に盲女は働くに職なくとたんの苦しみをし居たのであります大師は是を憐れませ給いて福島県梁川にお生れなされた貝田和迦巫と云う法尼にこの秘法を相伝し給うた事に始まるのであります……

と刻字されている。碑文①は，仏陀の弟子目連がインドから中国に口寄せ「招霊」の秘法を伝え，それが慈覚大師・円仁を経て，大和宗のオカミサンと呼ばれる盲女に至った由緒である。晩唐の847年頃，長安に寄居していた円仁は，当時定期的に行われていた俗衆相手の説教「俗講」を聞いており[12]，その俗講で最も人気のあったのが「目連救母」の話であった[13]。ここに，目連と円仁の間接的関係があるともいえよう。だが，インド人の目連が存在したときから晩唐までにはすでに1300年ほども経っているし，仏教の伝来は漢朝を待たねばならないから，円仁が目連本人から伝授されることなどありえない。抑々，釈尊の秘法が

伝華するのに目連の介在は不要なはずである。それなのに目連が介在しているのは，後述の彼の「神通」によるのであろう。目連の神通力は『仏説盂蘭盆経』ばかりでなく，既述の『三国伝記』，『もくれんのさうし』，『目連記』，能楽『目蓮』等々，「目連救母」の話を通して，中世のわが国において浸透していた。その目連と勅号「慈覚大師」を賜ったほどの円仁が著名な天台の高僧であったから，こうした伝説が成立するのも不自然ではなかろう。円仁と大和宗の結びつきに至っては，さらにわかりやすい。大和宗が天台宗の中尊寺の管轄下にあり，かつ中尊寺の開祖が円仁であったことで口寄せの盲女がその御慈悲により，秘法を授かりそれを生業に生活できたとしているからである。

4　目連の口寄せ

中国の目連物において，目連を口寄せと結びつけた話は寡聞にして聞かない。ところが，②の『大和宗の縁起並大乗寺史録・大和宗の縁起』には，

> 釈尊御在世の時十大弟子の一人で神通第一と称された目蓮尊者が亡き母の恋しさから，或日釈尊にお問いなされた。いかにして亡き母に会えるやと，釈尊は懇ろに招霊の秘法を伝授せられたが尊者はその法によって母を招霊し親しく法のことなどを語り会ったと言うこの事に始まり，……（1頁）。

と記されている。本来，目連故事の縁起である『仏説盂蘭盆経』では，「神通第一」の目連が自分の「道眼」で母が餓鬼道に堕ちていることを「観視」し，自らの神通力で餓鬼道の母に食物を持参し食べさせようとしたのだから，自力で面会しており，仏陀に「招霊の秘法」を授かる必要は全くないのである。『仏説盂蘭盆経』で，仏陀が授けた「秘法」は，いかにして亡き母に「会えるか」ではなくて，いかにして「餓鬼道から救済するか」であった。では，なにゆえに「招霊」の秘法を授かる弟子が，阿難など他の弟子ではなく目連でなければならなかったのかといえば，それは『仏説盂蘭盆経』の目連が「道眼」で，異界にいた母の行く末を「観視」して探しあてた，この異界との「交感」可能な神通力こそが「招霊」なる観念を抽出させたのであろう。では，なぜ目連が招霊秘法の伝授を釈迦に求めたかというと，「亡き母の恋しさから」で，具体的には以下のごとく語られている。

> 目蓮尊者の母親様が，その目蓮尊者様の幼いうちになくなったんだって。そって，後はいつもいつも，幼い子供で，ほら，あの世さ行ったから，まずオレがお前の母だって，その枕許に立たれてとらわれてしょうがなかったんだって。で，いつかその亡き母の声を聞きたいと思って，なにかしら言うことがあるためにこの世に姿を現わすだから，なんとかしても降ろされねえだかってお釈迦様さお尋ねしたれば，……（註4　68頁）。

> 目連尊者はお釈迦様の所さ行って，母親を生き返らすこどはできねえもんだろかって尋ねたんだどさ。したれば，お釈迦様は生き返らすことはできないが，そんなに会いたいなら，声だけは聴くことができるっていったんどしゃ（註5　159頁）。

これは阿部まつみの語りだが，目連が幼いうちに母親を亡くし母に対する深い想いをもっているうちに，母が枕許に立つようになったので，母の声が聞きたいという強い願望をいだくようになって釈尊に相談したら，招霊の秘法を伝授してくれたというのである。

5　目連との接点と仏陀の口寄せ

佐藤敏悦氏は，石巻のオガミサマ・佐々木きゑの伝承する祭文『太子の本尊』をとりあげ，その後半の主題が「口寄の功徳と梓弓の由来」であるから，語り物ではなく巫達が独自に伝承してきたものであろうと指摘された。佐藤氏の採取資料では，太子，即ち釈迦が出生後7日目に他界した母の摩耶夫人のことを「この世になからん人の，御行方を尋ねばやと思し召し」と，会いたい願望を巫に託すと，巫は梓弓を撃って，招霊の秘儀を行い，最後に「血の池くげんものがれつつ，つぼみし花を手に持って，ひらけし花をかさとなし，蓮華の茎を杖とさだめ，などや極楽往生疑いなしとおおせける」という，佐々木きゑの娘・たき子が語った話を記録されている(14)。

釈迦（太子）が巫を呼び寄せ亡母の口寄せを依頼していたのは，母の摩耶夫人が太子を出産してまもなく死去してしまったので，母への思慕の念から発したものであった。それが，既述の目連が同様の境遇にあったから，目連の招霊に繋がったのである。ただ，この『太子の本尊』では，釈尊自体ではなく巫がその依頼をうけて母の招霊をしている。特に注意すべきは，血の池苦患から救済し，さらには極楽へ済度しうる能力を，巫が有すると表明している事である。それは，招霊を単なる巫の巫術に止めず，釈迦の救済の代行者として権威付けようとした意識の表れである。しかしそれでは巫術そのものが釈尊と関連がうすくなる。そこで①や②にあるように，釈尊自身がその秘法を行って目連らに伝授したとなれば，巫術も救済の代行者である巫も釈尊の権威が賦与されるので，つぎのような口承が語られるのである。これによって，大和宗の巫は直接釈迦のお墨付きを得た。白鳥伝氏の採取した宮城県登米郡石越街芦倉の菅原昌雄が伝えている祭文がそれで（註3　37頁），

> 世尊モクレンを始め護持の諸ぼ薩及び大衆に告げてノタマワク，「ナンダツ（難陀太子？汝達？）よくきけ，われかって恋しき父ヨーボン王（浄飯大王）」の母摩耶夫人の御声を慕い聞かんと慾し，……これを打ち竹と定め真弓を打ちならし，大衆と共に行ずる時は，ジンチたちまち起り招霊することを得たり。時に紫雲棚引き，父母しずかに現れ給いて，久方ぶりに恋しき父母のノリの言葉など語られけり。さればナンダツよ，ンネンネ（？）疑うことなかれ。恋慕するものあらば，この秘法を念じて降霊し，さとりを得べし。又わが滅後も末法の世までも弘め，あまねく衆生を救うべし，とのたまえば，モクレン始め皆居る諸人諸ぼ薩及び大衆は，身にカンキさだめて世に後生に伝え，フエンせんことを誓いまつり奉行し去りしと言う。これより世尊滅後も承伝してトウドウ（唐土？）に伝えらる。とうどうにては半弓をもって秘法を弘め給う。わが国にては，慈覚大師がこれを修めゲンミツの秘法とともに，あまねく盲女に伝受し給いて，苦界に流転する凡夫

を済度せよ，と教え給うたのである。

と述べる（妃で釈尊の母であるべき摩耶夫人が浄飯大王の母となっているなど，すべて原文どおり）。これによると，釈尊自身が降霊の秘法を用いている。秘法を行なうと，紫雲たなびき，父母の姿が現れ，恋しい父母の言葉を聞くことができた。そこで，仏陀は恋慕する人がいるなら，この秘法を念じて降霊できるから，自分の寂滅後も末法の世まで弘めて，あまねく衆生を救うようにとおっしゃったので，目連初め，居並ぶ諸人，諸菩薩，および諸衆は歓んで世に，後世に伝えることを誓って行なった。そして，唐土にも伝えられ，わが国の慈覚大師がこれを修得してあまねく盲女に伝授し，この降霊秘法で「苦界の凡夫を救済せよ」と教え賜ったというのである。

以上見てくると，佐藤氏が採取した『太子の本尊』では釈尊が思慕の念から巫の巫術に託したのを，釈迦自身，目連自身が招霊の秘法を行った事にして，逆にそれらを祖師にすることで巫の巫術に権威を与えようとしたとみえる。さらに，これは前掲の『太子の本尊』と同様に巫術の亡者救済を力説し，それが延いては目連の母の救済に結びつけられるようになったのである。釈尊が目連に伝授したことについては，千田よしのの語りに，

> そして，目連と言う人が，そんで，お釈迦様の御修行さなっているとこさ行って，「お弟子にしてもらいたい」って，そうしてから，先に付いでるお弟子さんに，……麻の衣の糸を引かせて，縒って，そうして，弓を張って，そして，その弓竹と言うもので，神おろしを拝むことを降ろしたんだってね。そうしたれば，目連が語るようになったんだって。その目連が，それから，これを只でもったいねえから，そんで，目の見える人は，どう言うことでもする人だからって，その目連だの御釈迦様がね，オカミサマって言う見えない人に語れるように，「クチブク」と言うものすることを教えだと言うことがあった（註1　120頁～121頁）。

とあり，円仁ではなく，目連がオカミサマ達に伝授したというのである。あるいは大和宗が中尊寺から独立したから，このように語るようになったのかもしれない。

6　目連とその母の罪に対する口寄せ語り

『仏説盂蘭盆経』には，母の罪状が具体的に記されていない。それゆえに，金野カツメが，ただ「釈迦のある弟子の母が，強欲のために地獄に落ちた」（註7　25頁）と語るにとどまっているのも，無理からぬことである。母が他の餓鬼に食物をやらなかったから，わが国での罪状を多く「慳貪」としている。中国の影響をうけた『三国伝記』や，北陸地方の盆踊唄に描かれた具体的悪事をなす母親像は，むしろ例外に属するのである。菅原きせの語りでは，

> その目蓮尊者の母親って人が，この世にいた時悪人だったんだって。うんと欲深くてにゃ，欲深くてまず邪教だったんだとしゃ，人がどうでも自分ばかり生きてればいいちゅんで（註4　69頁）。

と語る，この「欲深くてまず邪教（筆者；邪慳？）だった」が一般的な罪である。これも原経の延長上にある観念であろう。しかし，少々変わった語りもある。それは，千田よしのが語ったものである。

> 目連と言う普通の人が，お釈迦様さね，「お弟子になりたい」って，そういったんだって。「その訳があるはずだ」って（お釈迦様が）言ったればね，「いや，実は私の母親が薄情な母でね，私，妻を迎えたけども，オカズにしても何にしても，妻にやらないで，私にばかり，おいしいもの出したんだ」ってね，「そんで，私は，こんで，こんなふうでは妻は置かれね」ってね，「子供もなかったしね，するからって，その妻を出して，そして母親ばり一生懸命あずかってるうちに，母親も倒れたらば，その目連と言う人が，もうどうしたって，うとうとって眠れなかったんだって。そんで，したれば，薄情な母親が行ぐどこさ行がれねから，そんで，なんとか拝んでもらいたいって，ふんだらば，お寺さ頼んで拝んでもらったって，だめだったんだってね。（註1　120頁）。

千田が語った目連の母の罪も「慳貪」といえよう。また，母の目連に対する偏愛は，『もくれんのさうし』，説経節『目連記』，能『目蓮』など，わが国目連物に一貫して流れる母のイメージである。ただ，ここで注目したいのは，語り手が「目連」とは出家後の法名であることを知らない（他の日本の目連物にもあるが）ことと，中国では許されない，他の日本の目連物にもない，目連妻帯のことである（明代の鄭之珍『目連救母勧善戯文』に許婚は出るが）。ここには「神通第一」ではない「普通の人」である目連が出現している。

7　招霊の秘法と母の口説

口寄せ儀礼の情況は，クネヒト・ペテロ氏が写真と図を書いて詳述している[15]が，⑦金野カツメの語る目連故事を紹介したところに，

> オカミサマが到着すると一番上の座敷に通し，あらかじめ設けておいた祭壇に，位牌，供物などを飾る。祭壇には正面奥に位牌，左右に白米一升を盛った器，真ん中に豆一升を入れた器を置く。豆の前に線香・ろうそく・団子・お水などを並べる。向かって左の白米皿に桃の枝，右には柳の枝を立てる。この場合は女のホトケで，左右が逆になれば男のホトケであることを示す。枝には麻糸一筋を垂らすが，これは「釈迦のある弟子の母が，強欲のために地獄に落ちたのを，柳の枝に麻糸を張って弓となし，桃の枝で鳴らして，その霊を招いた」という故事に由来するものという（註7　25頁）。

と具体的な祭壇の様子を述べている。因みにこの「ある弟子」とは当然目連を指す。冒頭に挙げた③の菅原昌雄，⑥クネヒト氏の報告，⑧千田よしのなど，他の伝承もほぼ相似ている。いま，⑤阿部まつみの語るところでは，

> 観世音菩薩様が立っている，南の方さ行って，観世音菩薩様が着ている麻衣の袖から，

一本もらってきて，今度は檀特山の東の方から，桃の枝を七尺に切ってきて，それから西の方から，柳の枝を三尺二寸に切ってきて，七尺の桃の枝は弓の台にして，麻糸を弓弦にして，三尺二寸の柳の枝を弓撥にしろといわれたんだどしゃ。そうして，目連尊者が弓を叩き，観音経を唱えると，母親が現れてきたんだど。

とあり，さらに菅原きせも「観音経からお唱えしたっけ，そうすると目蓮尊者の母親様が，そのまず現れてうんと口説いて泣いた（註4　69頁）」と語る。かくて，いよいよ母親の亡霊が現れ，それを巫が口寄せする。その内容は，⑤の阿部まつみが，

母親が現れてきたんだど。目連尊者の母親が泣いて口説くことには，極楽浄土に行きかねて，餓鬼道に堕ちているため，とても腹が減り，痩せこけている，食べ物でも，水でもいいから，もってきてくれって。

と語るところから，母が餓鬼道に堕ちていることを知る。さらに阿部まつみは続けて，

そこで，目連尊者はご飯を炊いて，母親のところさ持っていくと，そこには罪人がたくさんいだんだどしゃ。ご飯は母親の口さ入る前にひっくりがえり，落ちて燃え上がってしまったんだど。母親のためにせっかく炊いたご飯がどうして燃えて灰になって，煙りになってしまったのかって，目連尊者はお釈迦様に尋ねてみたれば，何といってご飯を母親に食べさせたんだと聞かれたんだど。母親に食べてくださいっていったって答えなんだどしゃ，目連尊者はね。そうすっと，腹が減ってるのは，お前の母だけでなく，周りの罪人たちも腹が減ってんだから，皆で食べてくださいっていわなければだめなんだって，お釈迦様はおっしゃってんだど。それがら，目連尊者の修行が足りないから，ご飯が燃え上がったんだがら，百日間の修行をしてきなさいって，お釈迦様に指図されたんだどしゃ。修行のちょうど百日目が，旧の七月十五日。目連尊者はお経を唱えて，ご飯を炊いて，母親のところさ持って行ったんだど。それにナスやキュウリも持ってね。今度は，母親にも罪人たちも，皆の口にご飯が入ったのしゃ（註5　160頁）。

と語る。ほぼ『仏説盂蘭盆経』を祖述しているが，弟子入りしていた目連尊者が母だけに食物を与えるとか，母の口に入らず「火炭と化す」のを「落ちて燃え上が」るとか，そして「百日の修行」をさせるなどとは原経にない文言である。また，衆僧が修行を終え懺悔をする百日目の「僧自恣」の日（7月15日）に世の甘味を尽く供養すれば，衆僧は仏前の塔寺に供えて呪願してくれ，それで餓鬼が苦を脱するという原経と相違して，ここではふたたび食事を持参しているのである。クネヒト氏の採取したものでは，旧7月15日に持参して燃え上がって再度持っていく事になっている（註6）。わが国の目連物は概ね他の餓鬼にも施し，それで母親の「慳貪」が解けるとしているのである。それは盂蘭盆と施餓鬼が，説経節や北陸の盆踊り歌の詞章に見られるように，室町時代以降，混同されるようになったからかもしれない。また，少々矛盾を感ずるのは，母の声を聞き，亡霊と面会しているのに，『盂蘭盆経』の経文にしたがって母に態々面会に行っているところである。

8　目連の母の救済と口寄せ目連の特徴

肝要な救済については阿部まつみが，

> お釈迦さまは目連尊者に，母親をどうしても極楽に上げてやりたいなら，お蚕様の真綿を蜘蛛の糸代わりにして，それで引っ張ってやれって，おっしゃたんど。こうして，母親も罪人も真綿の糸に引っ張られて，極楽浄土さ上がってきたんだどしゃ（註5　160頁～161頁）。

と説き，さらに菅原きせが，

> 御釈迦様がね，『んだらば，その子供の□□□の目蓮尊者がそれほどに苦難儀して行して母を助けて極楽・修羅道さ上げてえって□□んだらば，お前の気持ちばかりでもその［どうしようもないから］，クモの糸引いて極楽さひっぱってれ』ってね，言われたんで，そのほら，クモの糸の代わりに真綿ってやつ，オカイコサマから取るんだからね，あの養蚕，カイコからっしゃ，んだからそのカイコから取った真綿を弓さつけて，そって，麻と何してホトケサマ降ろすの，新しいホトケん時はね（註4　69頁）。

とあって，目連の母の救済に招霊して，その霊魂を梓弓の弦の上で渡し極楽へ引き上げるとするのである。

本来，お盆の縁起になった目連救母故事が，口寄せ目連では母が盂蘭盆の法会によって救済されるのではなく巫の秘法によって救われる。既述したごとく，巫術が仏教の済度と結合し，しかも盂蘭盆の縁起となった目連の故事とも結びついたため，ここに「口寄せ語りの目連」という特異な目連物が生まれた。儀礼に付随して語られてきた話だけに，それ自体の曲折やドラマ性は薄いが，他のどの目連物にもない内容を含んでいることは確かであろう。以上，伊達藩領域内での巫の口寄せ語りに表現された目連故事をみてきた。ここには，中世から民衆に育まれてきたわが国民間仏教と巫の習俗が入り混じった独得の目連物が表現されており，まことに興味深く貴重なものといえよう。

註

1. 川島秀一氏はそれまでの数篇の論文を『憑霊の民俗』（三弥井書店　2003年）のまとめられた。
2. 大和宗30周年記念に出版された（大和宗宗務庁　1971年）1頁。
3. 「東北巫の源流」一（『栗原郷土研究』所収　栗原郡郷土史研究会　1970年）37頁。
4. 文化庁文化財保護部『民俗資料選集』31「巫の習俗」V—宮城県（国土地理協会　2003年）。

5. 川村邦光『巫の民俗学』(青弓社　1991年　159頁～161頁)。
6. *Itako and Mokuren : An Instance in the Ritual of Kuchiyose* (*Calling the Dead*) [SHAMANS and CULTURE] International Society for Trans-Oceanic Research, Los Angeles 1993。
7. 文化庁文化財部編『民俗資料選集』14「巫の習俗」I 岩手県 (国土地理協会　1985年) 25頁。
8. 註1『憑霊の民俗』120頁～121頁。
9. 註5『巫の民俗学』44頁～45頁。
10. 註1『憑霊の民俗』100頁～101頁。
11. 註5『巫の民俗学』45頁に転載 (大和宗宗務庁　1952年)。大和宗は聖徳太子と慈覚大師を宗祖とした。
12. 『入唐求法巡礼行記』(上海古籍出版社　1986　上海) 147頁。
13. 俗講の種本ともいうべき敦煌変文の現存数12点4系統で最多に属す。『敦煌変文校注』(中華書局　1997年) 1016頁。
14. 「語り物と民間巫伝承の研究二」(『石巻市史編纂資料』第二集所収「伊寺水門」石巻市史編纂委員会　1979年　109頁～111頁)。
15. クネヒト・ペテロ「口寄せに呼ばれる」(『民族文化の世界』(上)　小学館　1990年 138頁～139頁)。

[附記]
拙文を書くに当たり，川島秀一，佐藤俊悦，クネヒト・ペテロ，清水昭俊など諸先生の御示教を賜った。ここに鳴謝する次第である。